

18世紀のアイランドの図書館：マーシュ図書館とリネン・ホール図書館

The 18th century libraries in Ireland: Marsh's Library and Linen Hall Library

須 永 和 之

Kazuyuki SUNAGA

1. アイランドの図書館文化の歴史

ヨーロッパの極西に位置するアイランドは、図書館の歴史もイギリスの隣国としてその影響下にあった。これまでは、アイランドの近代公立図書館の歴史は、19世紀後半から始まると理解されており、それ以前の歴史を辿ることはなかった。しかしながら、近代以前の図書館文化の歴史は古い。

時代を遡れば、アイランドは中世において他のヨーロッパ諸国よりも早くローマ・カトリックが根付き（5世紀の聖パトリックの伝道）、中世ヨーロッパのキリスト教文化の至宝とまで言われる「ダウローの書 [the Book of Durrow]」「ケルズの書 [the Book of Kells]」をはじめとする、装飾写本が生み出されたヨーロッパ随一の文化国であった。現在のイタリア、スイス、ドイツ、フランスに残る、6世紀以降成立した修道院のいくつかは、なかには廃墟になってしまった修道院があるが、アイランドやイングランドの修道僧の伝道活動により創設された。イタリア・ジェノヴァ近郊のボッピオの修道院を建てたのは、アイランドからヨーロッパ大陸へ伝道を始めた聖コロンバ（聖コラムバン、小コロンバヌス、543頃～615頃）であった(1)。スイスにあるザンクト・ガレンの修道院は、聖コロンバに付き従ったガルスがこの地に建てた礼拝堂が荒れ果て、そこへアレマニアのオトマールが建てた修道院が起源となっている(2)。その後もアイランドからの巡礼を受け入れ、ザンクト・ガレン修道院にはアイランド語の写本が比較的多く残されている(3)。シャルルマーニュ（カール大帝）のアーヘンの宮廷に花開くカロリング・ルネサンスで活躍するアルクインも、イングランドから渡り伝道活動を行った修道僧の一人であり、その宮廷にはアイランド出身の学者が多く受け入れられていた(4)。中世ヨーロッパの文化を陰で支えたのは、アイランドであったといっても言い過ぎではない。

アイランドで最古の図書館は、おそらく中世に建てられた修道院や教会にあった書写室・書庫などの施設を付設した図書館であったと思われる。しかし、8世紀の半ばから始まるスカ

ンジナビア諸民族（ヴァイキング）等の侵攻により、これらの多くは破壊され、数多くの蔵書は失われた。さらに、チューダ朝の時代の宗教改革により、修道院は荒れ果て、その蔵書の多くは散逸する。

アイルランドの現存する図書館で最も長い歴史を持つのは、1601年に建てられたトリニティー・カレッジ [Trinity College] の図書館である。トリニティー・カレッジは、現在アイルランド共和国の首都ダブリンにある大学で、イングランドのエリザベス1世の勅命で設立された。その時代に建てられたオールド・ライブラリー [Old Library] のロングルーム [The Long Room] は当時の図書館建築として粋を誇っている。世界的に著名な「ケルズの書」はこの図書館に所蔵されている。

アイルランドのパブリック・ライブラリーの多くは19世紀に飛躍的に発達する。それはイングランド及びウェールズにおける図書館法成立（1850年）後に、その統治下にあったアイルランド（19世紀初頭にイギリスに併合された）に波及し、1855年アイルランド図書館法が成立して発展を遂げた(5)。こうした動向とは直接には結びつかないが、18世紀初頭からアイルランドでは、すでにパブリック・ライブラリーが存在していた。もちろん現在のパブリック・ライブラリーとは異なった様相である。本論稿では、18世紀の初め、南部の都市ダブリンに設立されたマーシュ図書館と、18世紀末に北部の都市ベルファーストに設立されたりネン・ホール図書館の、2つの図書館の成立の過程を通して、アイルランドのパブリック・ライブラリーの歴史的様相を考察する。

2. パブリック・ライブラリーの定義

パブリック・ライブラリーは、かつては、個人の書斎、書庫、私的な図書館の対立概念としての、大衆に公開され利用されることを目的とした図書館という意味で使われてきた。その意味では、ある組織・機関が設置する図書館で、多くの人を使う図書館はすべてパブリック・ライブラリーである。この定義のなかには、議会図書館や州立図書館、学生用図書館、会員制図書館までも含んでいる。

しかし、最近ではパブリック・ライブラリーの定義は限定的に使われている。森耕一によれば、ユネスコの公共図書館宣言の中で、近代公共図書館の五原則として、1公開 2無料 3公費支弁 4法的根拠 5民主的な機関 であることが明示されているとしている(6)。川崎良孝は、アメリカ図書館協会『図書館用語集』等の定義の検討を行った上で、パブリック・ライブラリー、すなわち限定的な意味での公立図書館の定義の要件として、「公開性」「公費負担」「無料制」「明確な法的根拠」をあげている(7)。いずれにせよ、公共図書館の定義は極めて曖昧であるため、本論では用いない。

ソーシャル・ライブラリーは、所有者図書館と会員制図書館に分けられるが、資金を提供す

る所有者が利用者に権利を与える、ないしは会費を支払う会員が図書館を利用する権利を得る。個人で図書や雑誌を購入するのが、金銭的に困難な時代に、会員を募り共同で資料を購入し利用するという会員制図書館があった。幅広くみるとパブリック・ライブラリーの一つの形態であるが、公費による負担で無料公開をする限定的な意味でのパブリック・ライブラリーとは異なる。

本論稿で考察する18世紀のアイルランドのパブリック・ライブラリーは、限定的な意味でのパブリック・ライブラリーとはかなり異なるが、18世紀における近代的パブリック・ライブラリーの萌芽期のひとつの様相として捉えてみたい。限定的に捉えたパブリック・ライブラリー、すなわち公立図書館との違いを明確にしながら、今日の図書館への淵源を辿ってみたい。

3. マーシュ図書館：教区図書館からパブリック・ライブラリーへの転換点

(1) マーシュ図書館の設立

マーシュ図書館 [Archbishop Marsh's Library] は、ダブリンの町の西に位置し、セント・パトリック大聖堂に隣接している(8)。この図書館はナールシサス・マーシュ大主教 [Archbishop Narcissus Marsh] によって1701年に建てられた。アイルランドでは最初のパブリック・ライブラリーである。設計にあたったのは、王立キルメイナム病院（現在は近代美術館）の初期の建築家であったウィリアム・ロビンソンである(9)。

ナールシサス・マーシュは1638年イングランドのWiltshireに生まれた。オックスフォード大学に学び、1679年にはトリニティー・カレッジの学長としてアイルランドに赴任し、1691年キヒャエル、1694年ダブリン、1703年アーマーとアイルランドの主教座教会の大主教に任命された。1713年に亡くなり、その遺体は図書館の傍ら、セント・パトリック大聖堂の敷地に埋葬された(10)。

現在でも、マーシュ図書館は18世紀はじめの創建当時の頃の建築、内装を残している。彫刻と文字が刻みつけられた破風のついたダークオークの書架(11)や、鍵をかけて特別に許された読者が利用できる稀観本をおさめた「ケージ」（アルコーブの入り口にワイヤーをめぐらした「檻」のようなもの）(12)が残っている。また開館当初は、盗難などの被害をおそれて、



1. マーシュ図書館

多くの図書が鎖で書架や書見台につながれていた。こうした図書を鎖でつなぐというのは、中世の修道院や大学の図書館に多く見られたが、18世紀はじめから一般的でなくなったと言われ、1715年に設立されたヘレフォードの万聖教会の教区図書館が鎖つき図書館としては最後のものであると言われている(13)。マーシュ図書館も、鎖つき図書館の比較的最後の時期の図書館であり、開館当初の頃は、貸出を目的とする図書館としてではなく、学術参考図書館としての性格が強かった。

もともとナールシサス・マーシュの図書館創設の目的は、多くの人たちが“publick use”に図書を利用できることにあった(14)。図書館の主な利用者として想定していたのは、彼が学長を務めたことのあるトリニティー・カレッジの学生で、大学図書館の利用を拒否された学生たちが対象であったらしい。こうした聖職者が図書館を建てることは決して珍しいことではない。1550年から1800年に設立された図書館のうちで、1680年から1720年まで40年間に約80館の図書館があらわれ、これらが町および教区の図書館で、町の富裕層からの寄贈、聖職者からの寄贈で図書館が建てられた(15)。特に顕著なのは、これがプロテスタント系の聖職者に見られることで、マーシュもアイルランド国教会に属していたことから、その背景には当時の教区図書館の流れが見て取れる。

(2) アイルランド図書館法

1707年に「恒久的なパブリック・ライブラリーの設置と維持に関する法」という法案がアイルランド議会で可決され、理事会で理事と管理委員 [Governors and Guardians] が任命されて、この図書館の管理運営がされた(16)。当時のアイルランド議会は、イギリス国教会派ののアングロ・アイリッシュの議員を中心に構成されていたが、アイルランドの独立性を支持していた。しかし、1801年イギリスのアイルランド併合で、アイルランド議会はイギリス本国の議会に統一された。当時のアイルランド議会の建物は、現在ダブリンのアイルランド国立銀行になっている。

理事等の構成メンバーは、アーマーとダブリンのアイルランド大主教教会の大主教と、セント・パトリック大聖堂とクライスト・チャーチの主席司祭、トリニティー・カレッジの学長の専任理事・管理委員と、その他イングランドの大法官を含む4人の兼任理事であった。これらの兼任理事は1922年のアイルランド自由国成立の際に消滅することになる。

18世紀のイギリスでは、いくつかの教区図書館の運営にあたっては、理事などが任命されたことがあった。国家の公的な法規、いわば図書館法によって管理運営が規定されたという点では、近代的なパブリック・ライブラリーの萌芽を認めることができるのではないか。これとほぼおなじ頃、トマス・ブレイの考えに基づいて、1700年前後にアメリカの植民地のメリーランド、カロライナで、図書館法が成立している(17)。1709年には、イギリス（当時のイングランドとウェールズ）でも教区図書館についての法律が制定されている(18)。

しかしながら、こうした図書館法は、19世紀中頃に成立するアメリカ、イギリスの図書館法とは異なる。教区図書館、それらに類似する図書館の特定の図書館についての法律であり、いわゆる今日的な、限定的な意味でのパブリック・ライブラリーの設置に関する図書館法に直結するものではないが、法的に図書館の管理運営を規定するという点で近代的であると考えられる。

(3) マーシュ図書館のコレクション

現在、マーシュ図書館には、16世紀から18世紀にかけての25,000冊の4つの主要なコレクションがある。そのほとんどのコレクションに共通して言えることだが、キリスト教関係の書物、典礼書、祈祷書、様々な言語に翻訳された聖書、神学書が多く含まれている。しかしそれだけではなく、15世紀のインクナブラや、当時の医学、法学、自然科学、数学、音楽、古典文学等の書物や、旅行記、航海術、測量術などの書物までもが含まれている。創設者のマーシュ自身が自然科学や数学、音楽に深い関心を寄せて、数学の書物には彼自身の注釈を書き込んだものが少なくない。こうしたコレクションとは別にアイルランドの近代史に関する資料として図書や雑誌も多く保存されている。

最も重要なコレクションはウスター主教エドワード・スティリングフリート(1635-1699)の文庫からのもので、1705年にマーシュがその蔵書のほぼ10,000冊を2,500ポンドで買い上げた。この中にはピンソン、ウォルフ等のイングランドでの初期印刷業者による刊行本が含まれている。スティリングフリートの蔵書は当時のイギリスでは最もすぐれた個人蔵書のコレクションの一つであった。1759年に開館する大英博物館の蔵書コレクションの基礎となった、スローン卿の蔵書が約40,000冊、ハーレー伯の蔵書が写本の約6,000冊、公文書類の約14,500冊であったことと、比較すると相当な蔵書であった。

次に重要なコレクションは、マーシュ自身の蔵書で、東洋の写本のコレクションを除くほとんどの書物をこの図書館に残した。東洋の写本のコレクションは、おそらく出身大学のためだろうが、オックスフォード大学のボドレー図書館に寄贈した。彼のコレクションの特徴は、偉大な宗教家であったにも関わらず、自然科学、数学、音楽についての図書の収集と、ヘブライ語、アラビア語、トルコ語、ロシア語などの外国語の図書の収集によっている。マーシュ自身、特に音楽には造詣が深く、彼がオックスフォードに住んでいた頃から、練習やコンサートに使った楽譜が残されている。この中にはリュート演奏のためのタブラチュア(音符以外の記号法で書かれた譜面)が含まれている。外国語の図書では、イタリアで1491年に刊行されたヘブライ語のインクナブラ(グーテンベルクの活版印刷以降1500年までに刊行された図書。揺籃期本、初期刊行本)や、ロシア語の初期刊行本などが含まれている。18世紀のアメリカやイギリスの図書館が、いくつかの例外的な図書館を除いて、蔵書全体の中で割合として神学関係の図書が多かったことを考えると、マーシュ図書館はいわば世俗的な図書の収集に力を注ぎ、利用提供を行って、単に聖職者が教理を広めるための図書館ではなかったことを示している。

この図書館の最初の図書館員になったのは、1695年フランスから逃れてきたユグノーのエリアス・ブエロウ博士である。ユグノーとはフランスのカルヴァン派の新教徒のことであり、1598年アンリ4世のナントの勅令発布によって信教の自由が認められたが、1685年ルイ14世のナントの勅令廃止により、国外に逃亡するユグノーが増えた。おそらくブエロウ博士も勅令廃止により国外退去を余儀なくされたと思われる。彼の残したコレクションには、17世紀のフランスに関する図書、カルヴァン派プロテスタントの教理、論駁書に関する図書が少なくないが、パリのガリヨール・デュ・プレで印刷された「薔薇物語」等の初期刊行本もある。

その他にクロガー主教のジョン・スチアーヌ（1660-1745）が、1745年亡くなるときに遺贈されたコレクションがある。この図書館のコレクションの中で最古の刊行で、1472年にミラノで印刷されたキケロの「友人への書簡集」が含まれている。

「ガリヴァー旅行記」で著名なジョナサン・スウィフトは、マーシュ図書館に隣接するセント・パトリック大聖堂の主席司祭であったので、専任理事として年次視察に出向くことがあった。彼の遺品や、彼が書き込んだ本などが、この図書館には残っている。

（4）図書館史におけるマーシュ図書館の位置づけ

マーシュ図書館は、当初はトリニティー・カレッジの学長を務めたナールシサス・マーシュが創設したが、1707年アイルランド議会による図書館に関する法案により、専任理事と管理者によって運営されるに至った。マーシュ自身はアングロ・アイリッシュ（英国出身のアイルランド人）であり、国教会派に属している。また法案を可決した当時のアイルランド議会の構成員は、イギリス国教会派を中心としたプロテスタント各派によって占められていた。当時の利用者がどの階層であったか定かではないが、トリニティー・カレッジの学生を含めて、イギリス国教会派を中心としたプロテスタントの中産階級ではなかったかと思われる。コレクションの収集に関わった人物たちの多くは国教会派を中心としたプロテスタント各派であった。イギリスの教区図書館の多くはプロテスタントの聖職者がその創設に深く関わっている。こうした点でマーシュ図書館は、聖職者の蔵書が設立の動機となる教区図書館の流れを汲んでいる。

一方、この図書館は、マーシュ自身が宗教書中心に蔵書を構成せずに、宗教書以外の図書の収集に力を注いでいるところから、布教を目的としたり、利用者に教理の理解を求めたりすることを全面に押し出した図書館ではなかった。おそらく、トリニティー・カレッジ等の大学図書館に匹敵する学術図書館であることを目的としたと考えられる。また、比較的早期にアイルランド議会でも可決した法案によって理事会による運営を確立したことは注目に値する。こうした点で、近代的なパブリック・ライブラリーの道が踏み出されたと考える。

18世紀のアイルランドでは、イギリスのカトリック教徒に対する刑罰法による抑圧は厳しく、アイルランドの住民の大半を占めるカトリック教徒の自治意識を脅かすイギリスへの抵抗意識が高かった。また必ずしもカトリック側の宗教上の対立意識を理由としただけでなく、急進的

なプロテスタント側からもアイルランドの自治と経済的な独立を求める動きがあった。この政治状況の中であって、マーシュ図書館はアングロ・アイリッシュのプロテスタントの学術公開図書館として成立したのである。

4. リネン・ホール図書館：会員制図書館から近代市民社会の図書館への出発

(1) 会員制図書館の時代

アイルランドの南部の古くからの町ダブリンのマーシュ図書館が教区図書館の流れを汲みながらパブリック・ライブラリーを志向していた図書館だったのに対して、北アイルランド・アルスター地方の都市ベルファーストに誕生したリネン・ホール図書館は、会員制図書館の組織から発展した図書館で、その発端は明らかにアメリカのベンジャミン・フランクリンのフィラデルフィア図書館会社（1731年成立）を範としていた（19）。

18世紀にアイルランド北部の新興工業都市として発展したベルファーストは、綿工業、リネン製造と造船業で栄える都市労働者と富裕な商工業者たちの町で、18世紀末にはその人口は約2万人に達した。住民の大半が、スコットランドからの移民に起源を持つ人たちで、プロテスタントの長老派（プレスビテリアン）であった。その他、ローマ・カトリック、メソディストなどのいくつかの宗派の住民がいた。プレスビテリアンは、国教会派と同じくプロテスタントであっても、当時のアイルランドではカトリックと同じく抑圧の対象であった。プレスビテリアンの住民の多いベルファーストは宗教に対しては比較的寛容で勤勉な土地柄であった。

18世紀の初頭までが、いわゆる教区図書館の時代だとすると、後半はいわゆる会員制図書館の時代になる。これは時代の担い手が都市に住む商工業の資本家と労働者たちへ移っていった証である。出版印刷業も急速に発展した時代だが、依然として書物は高価で、裕福な市民でも数多くの書物を個人で購入するのは困難であった。そのため、書物の購入資金を共同で出し合う会員制図書館のシステムが生み出された。

アイルランドでは、フィラデルフィア図書館会社成立の同年1731年にダブリン協会 [Dublin Society] が設立された。科学技術、産業に関心のある中産階級の人たちによって創設された読書クラブである。ダブリン協会は、後に王立ダブリン協会 [Royal



2. リネン・ホール図書館

Dublin Society] となる。この蔵書の一部が、現在のアイルランド国立図書館に引き継がれた。1785年にはダブリン大学出身者が中心になって王立アイリッシュ・アカデミー [Royal Irish Academy] が創設され、科学や文芸に関する図書、写本の収集に力が注がれた。南部の町コークでは1790年にコーク図書館協会 [Cork Library Society]、1803年にコーク王立学会 [Cork Royal Institution] が設立される。その他、北部地域でも各地に地域のジェントルマン [gentlemen] や学校の教員等が中心となった読書クラブが結成され、新しい学問を学び、文芸に親しむ運動が盛んになった。18世紀末は、イギリスの植民地下にあったアメリカ13州の独立 (1776年)、カトリック国のフランスで大革命勃発 (1789年) と、北米・欧州の政治変動がアイルランドの市民社会に大きな陰を落とし始めた時代である。その影響下で、アイルランドの図書館も次第に、近代的な図書館へと歩み始めた。

(2) ベルファースト読書協会からベルファースト知識推進協会へ

1788年5月13日ベルファーストに、ウィリアム・マックレリー [William McCleery] (なめし革職人)、ロバート・マコーミック [Robert McCormick] (銃製造業者)、ロジャー・モルホランド [Roger Mulholland] (建築家)、ジョン・ライブ [John Rabb] (印刷業者) ら15名が中心となって、ベルファースト読書協会 [the Belfast Reading Society] が結成された(20)。1760年アイルランド北部でデヴィッド・マンソン [David Manson] が学校教育を開始して以来、彼の革新的な教育を受けた生徒たち (この中から協会のリーダー的存在になる人材を輩出した) が育って、市民の教育水準がかなり高かったこともあり、篤志家のなかには個人蔵書を市民に開放している者もいた。既に文化的な土壌は熟しつつあった時期である。結成当初の15名のなかには裕福な中産階級の人たちも含まれていたらしいが、代表的なメンバーは進取の気質に富んだ職工等が中心であった。この点はフランクリンのフィラデルフィア図書館会社の結成当時に酷似している。

協会の結成時に決められた会則には、会費は1ヶ月1シリング (英国シリング) と定められ、会費の滞納、図書の破損・紛失などの罰則、理事会の設置と役割、図書の寄託についてが定められた図書の選択・購入については、理事会の5人のメンバーによって決定された (21)。

当初、小説等の文学作品の購入は厳しく制限され、科学技術関係の図書・雑誌 (当時のイギリスやアイルランドにあった学術協会・学会の機関誌) や一部政治的な内容を含んだ図書などが中心に購入された。特に笑劇 [farce] や娯楽的な要素の強い小説等の購入は理事会のメンバーの同意を得られなかった(22)。

結成後の4年間の出来事ははっきりしない。会合は、Ireland's Tavern、Drew's、Donegall Arms等の町の酒場や宿屋、いくつかの集会場を転々として行われていたようである。1792年、会費の滞納により財政的な危機に陥ったが、その年の4月ロバート・コールウェル [Robert Callwell] の事務所を通じて100ポンドの資金貸与があった。6月にも彼はロンドン協会の機

関誌を購入する援助を行っている。また、1772-73年には、長老派教会の牧師であったウィリアム・ブルース [William Bruce, 1757-1841] や、ナールシサス・バット [Narcissus Batt] (銀行家)、アレキサンダー・ハリデイ [Alexander Henry Haliday, 1730-1802] (医師・学者)、ウィリアム・リッチー [William Ritchie] (造船業者) ら、新しい会員が加わった(23)。図書の購入についても、依然として小説などの文学作品に対しては厳しい規制があったが、1792年9月11日の会合で外国語で書かれた有益な自然科学の読み物に対しては歳入の5分の1の購入費が充てられた。協会の名前も改められ、ベルファースト知識(教育)推進協会 [Belfast Society for Promoting Knowledge] となった。(24)

1792年にベルファーストで開かれたアイリッシュ・ハーブのフェスティバルを主催した会員たちを中心に、アイルランドの自然、市民社会、商業、宗教(キリスト教)の歴史についての関心が高まり、いわば民族・郷土資料の収集が始まった。ハーブ音楽などのアイルランド古代音楽の資料についての収集は、その後も続けられる。歴史、地誌、芸術、自然誌についての資料は購入や寄贈により増加し、さらにアイルランド、北米で発掘された化石や採取された植物標本を加えた、このコレクションがベルファースト博物館の設立へと発展して行く(25)。

増加する図書や資料(博物資料も含んで)は、当時建設されたばかりのリネン・ホールの部屋やいくつかの場所に分散されて収蔵されていたが、1792年5月に協会で最初の図書館員に任命されたロバート・キャリー [Robert Cary] の家に移され、1793年には会合も彼の家で行われるようになった。

1792年頃から、女性を会員として認める動きがあり、1795年の会則改訂で女性会員についての規則が定められた。改訂の時点では7名の女性会員がいたが、1798年に会員になったメアリー・アン・マクラケン [Mary Ann McCracken] がこの改訂の恩恵を受けた一人である。彼女は後述するユナイテッド・アイリッシュメンの活動家ヘンリー・ジョー・マクラケン [Henry Joy McCracken, 1767-98] の姉と思われる。彼の処刑後、会員になる権利を譲られた(26)。

(3) ユナイテッド・アイリッシュメン協会とリネン・ホール図書館の設立

1790年イギリスとカトリック国スペインとの戦争を機にして、当時の政権に反発したテオバルド・ウルフ・トーンがアイルランドの独立と自治を主張して、カトリックとプロテスタントの協力の必要性を説いた。その後、トーンはナッパー・タンディらと1791年ダブリンでユナイテッド・アイリッシュメン協会を結成する。アメリカ13州の独立やフランス大革命に影響された都市市民層の運動であったが、各地に支部が結成され、農民、労働者を巻き込んだ運動に発展する。その創立期のメンバーの一人に、ロバート・キャリーの跡を継いでベルファースト知識(教育)推進協会の図書館員となったトーマス・ラッセル [Thomas Russell, 1767-1803] がいる。やがて北部のベルファーストでも、それに共鳴する者が現れ、ユナイテッド・アイリッシュメン協会の支部が結成された。その会員の多くが、ベルファースト知識推進協会の会員で

もあり、図書館においても中心的な活躍をしていた。ヘンリー・ジョー・マクラケンは、その中で最も急進的な活動家の一人で、1794年2月に知識推進協会に加わった。1796年9月キャスレリー卿 [Lord Castlereagh] により、ラッセル、マクラケンら4人の活動家は逮捕され、ベルファースト知識推進協会は中心的な会員を失った。マクラケンはダブリンのキルメイナム刑務所に送られて後に保釈を受けたが、アントリム州の暴動の指揮をとったことで再び逮捕され、裁判を受けて絞首刑となった。ラッセルも図書館員の任務に戻ることなく、1803年に北部の反乱に参加し、反逆罪により絞首刑になった。その後、北部アイルランドの暴動が続く中、いくつかの読書クラブ (Doagh Book Club, Newry Literary Society) が壊滅的な状況になった(27)。

ラッセルが職を離れた後、図書館員不在の状態が続いたが、ハリデイ、ブルース、テンプレトン [John Templeton] (植物学者)、コールウェル [Robert Callwell] らは、急進的な活動とは超越的な立場、もしくは反対の立場をとり、知識推進協会の難局を乗り切った。1799年図書館はアン・ストリート [Ann Street] から、一時的にドネゴル・スクウェア [Donegall Street] のギルバート・マッキルヴィーン [Gilbert McIlveen] の借りていた家に移るが間もなく狭溢になり、1802年5月2日協会本部と図書館はホワイト・リネン・ホールに移設され、現在にも名を残すリネン・ホール図書館となった(28)。現在のドネゴル・スクウェアの建物に移るのは90年後の1892年のことである(29)。この時期できた会員制図書館が、その後も存続したのは珍しいケースである。

リネン・ホール図書館は、初期はベルファーストの職工や企業経営者を中心とした読書クラブであったが、1792年を境に財政的な危機を救った中流裕福層や、長老派の牧師、学識層を会員として迎え入れて組織の充実化を図った。ユナイテッド・アイリッシュメンの反乱による混乱の中、会員の中の急進的な活動家たちを失う危機に会うが、その後、1802年にリネン・ホールに場所を移し、再出発をすることとなる。この図書館の活動を支えた会員の多くが、アイルランドのプロテスタントの第二の勢力であったプレスビテリアン (長老派) であった。

5. 近代における図書館の発展とキリスト教

図書館とキリスト教の関わりについて論ずるには、もっと多くの例証を取り上げて論じなければならないが、近代欧米社会で生まれた図書館の発展とプロテスタント各宗派の教理との関係はかなり根深いものがあるように思う。1731年に成立したベンジャミン・フランクリンのフィラデルフィア図書館会社は、クエーカー教徒の州ペンシルバニアの宗教的・社会的な背景と無関係ではない。アメリカにおいて学校区図書館の成立に大きく関わったホレス・マンは、キリストを偉大な人格者と見るユニテリアンであったといわれている(30)。ボストン公立図書館の設立に関わった当時のボストンの富裕層はユニテリアンであった(31)。

中世の修道院図書館のような制限的な利用から解放され、近代ヨーロッパの図書館は、利用者へのサービスを目的として、施設と資料の公開を重視する方向に歩み始める。これには印刷術の発展による書物の増大と読者の増加が当然背景にある。一方、社会における宗教と図書館の在り方という観点から考えると、図書館はその側面として、近代市民社会における教会の性格を担ったのではないかと思われる。近代社会においては、それまでの絶対的な神の存在に替わり、世界・宇宙を支配する神の摂理を現す真理が優先する。その真理への探求の場は、教会に替わり、図書館になった。真理を探る手がかりは、聖書から離れ、神の摂理を示す自然科学の書となり、その場で奉仕する聖職者は主教・司祭から司書となった。このように考えるとき、図書館が万民に奉仕する機関としての性格を持ち得た経過を理解することができる。マーシュ図書館のマーシュやリネン・ホール図書館の成立に関わった多くの人物のなかに、献身的な執心を感じるのは、図書館が近代社会における「新たな教会」としての性格を持っていたからではないかと思う。

本論稿で取り上げたダブリンのマーシュ図書館とベルファーストのリネン・ホール図書館の成立は、18世紀のアイルランドの地域的・社会的・宗教的な相違を顕著に表している。また、時代的にも近代市民社会の成立期にあたり、図書館がそれぞれの社会の階層とどのように関わったかをよく示している対照的な例と言えよう。

参考文献

(WWWのsiteは1997年1月現在のものである)

- (1) 小野泰博. 図書および図書館史. 雄山閣出版, 1978. p.72 (日本図書館学講座; 10)
- (2) フォーグラウ, ヴェルナー編. 阿部謹也訳. 修道院の中のヨーロッパ: ザンクト・ガレン修道院にみる. 朝日新聞社, 1994. p.5
- (3) 前掲書., pp.99-111.
- (4) 小野, 前掲書, p.99-102.
- (5) ハーバード・ウィリアムズ, P. “アイルランドの図書館; 過去からの教訓と将来への提言.”
Library and Information Science, no.9, 1971. pp.134-142.
- (6) 森耕一. 公共図書館. 雄山閣出版, 1976. pp.15-22. (日本図書館学講座; 4)
- (7) 川崎良孝. 図書館の歴史: アメリカ編. 増訂版. 日本図書館協会, 1995. pp.9-13.
- (8) マーシュ図書館 <http://www.kst.dit.ie/marsh/library.html>
マーシュ図書館の建築 <http://www.nua.ie/ArchDub/18thc/marsh.htm>
- (9) マーシュ図書館の建築家 <http://www.nua.ie/ArchDub/bio/robinson.htm>
- (10) ナールシサス・マーシュ <http://www.kst.dit.ie/marsh/marsh.html>

- (10) ナールシサス・マーシュ <http://www.kst.dit.ie/marsh/marsh.html>
- (11) マーシュ図書館の書架 <http://www.kst.dit.ie/marsh/bookcase.html>
- (12) マーシュ図書館のケージ <http://www.kst.dit.ie/marsh/cage.html>
- (13) ケリー, T., ケリー, E. ; 原田勝, 常盤繁訳. イギリスの公共図書館. 東京大学出版会, 1983. p.33.
- (14) Power, Ellen. "Ireland, Library in the Republic of." Kent, Allen. Encyclopedia of library and information science, vol.13. Marcel Dekker, 1975. p.75.
- (15) ケリー, 前掲書, p.32.
- (16) McCarthy, Muriel. Archbishop Marsh's Library. (19--). Leaflet.
 "An Act for settling and preserving a publick library for ever, in the house for that purpose built by his grace Narcissus, now lord archbishop fo Armagh, on part of the ground belonging to the archbishop of Dublin's palace, near to the city of Dublin."
 Chapter XIX of the 6th Queen Anne.
 in the Statutes at large, passed in the parliaments held in Ireland,
 Dublin, Boulter Grierson, MDCCLXV, pp.169-179
- (17) 川崎, 前掲書, pp.19-29.
- (18) ケリー, 前掲書, p.42.
- (19) Killen, John. A history of the Linen Hall Library:1788-1988. Belfast, the Linen Hall Library, 1990. pp.5-6.
- (20) Ibid., pp.7-9.
- (21) Ibid., pp.9-11
- (22) Ibid., p.12.
- (23) Ibid., p.13.
- (24) Ibid., p.14.
- (25) Ibid., pp.27-39.,pp.173-191.
- (26) Ibid., p.22.
- (27) Ibid., pp.22-23.
- (28) Ibid., p.25.
- (29) Ibid., p.76.
- (30) 川崎, 前掲書, p.85.
- (31) 川崎, 前掲書, p.121.

アイルランド史についての参考文献

- (1) マコール, シェイマス ; 小野修編 ; 大淵敦子, 山奥景子訳. アイルランド史入門. 明石書店, 1996. 266p.
- (2) ムーディ, T.W., マーチン, F.X.編著 ; 堀越智監訳. アイルランドの風土と歴史. 論創社, 1982. 384,83p.
- (3) 松尾太郎. アイルランド民族のロマンと反逆. 論創社, 1994. 212p.
- (4) 波多野裕造. 物語アイルランドの歴史 : 欧州連合に賭ける “妖精の国”. 中央公論社, 1994. v, 282p. (中公新書 ; 1215)
- (5) カヒル, トマス ; 森夏樹訳. 聖者と学僧の島 : 文明の灯火を守ったアイルランド. 青土社, 1997. 341,10p.

あとがき

1996年9月、1996年度沖縄国際大学特別研究費（個人研究）で、フランス国立図書館と英国図書館の活動を調査する際に、アイルランドを訪れて偶然立ち寄った図書館で、日本ではあまり紹介されていない資料を手に入れ、この論考の執筆を思い立った。マーシュ図書館については、インターネットで得た情報を元に成立過程について肉付けした。イギリスの図書館については、日本でも多くの研究者が、その歴史を明らかにし、研究書の翻訳は多いが、アイルランドの図書館についてはほとんど知られていない。リネン・ホール図書館のように、読書クラブから会員制図書館へ発展し、その後も存続した図書館は、そう多くはない。18世紀のアイルランドの図書館史は、19世紀のイギリスの図書館法の成立を考える上で重要であると考えている。

最後に資料を提供して下さったマーシュ図書館のアン・シモンズさんに感謝の意を表する。

The 18th century libraries in Ireland : Marsh's Library and the Linen Hall Library

Kazuyuki SUNAGA

The 18th century public libraries in Ireland were different from modern public libraries. Marsh's library in Dublin, built by Archbishop Narcissus Marsh in 1701, was a sort of parochial libraries. However, Marsh's library was considered as modern public library. Because the government of the library was vested in Governors and Guardians under an act for public library, passed by the Irish parliament. The Linen Hall Library established in Belfast, an industrial town in northern Ireland. The Linen Hall Library has its beginning in a subscription library of the Belfast Reading Society founded in 1788. At first, it was the library of artisans and manufacturers who lived in the city. In spite of temporary crisis caused by the rebellion of the United Irishmen, it became an academic institution in Belfast.